

言語態・テキスト文化論 ブックガイド

このブックガイドは、言語態・テキスト文化論の世界を知るために、ぜひ読んでほしい本を紹介しています。「入門書」のほか、「批評理論」、「文化横断論」、「メディアとしての言語研究」という言語態・テキスト文化論を構成する三つの分野で区別をしていますが、多くの本はいずれの分野でも重要なものです。また、【物語論（ナラトロジー）】など、さらに細かい区分もしています。

●印の本はすぐにでも読んでほしい必読書で、言語情報科学専攻のコモンルーム（8号館3階）の書棚に揃えてあります。◎印の本も読んだらきっと役に立つ基本文献。○印の本はさらに詳しく学びたい人におすすめします。

入門書

●大橋洋一『新文学入門』岩波書店、1995年

テリー・イーグルトンの『文学とは何か』（大橋洋一訳、現在は新版が岩波文庫、2014）の注釈として書かれた、平易な入門書。批評理論の入門書としては最も優れている。

●デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か』（*What Is World Literature?*）秋草俊一郎他訳、国書刊行会、2011年

「世界文学」とは単に世界中の文学作品を集めたものではない。文学が特定の民族や言語のみに属するのではなく、人類に普遍的な要素も備えているという信念を反映した概念である。本書は、紀元前1200年ごろにまとめられた叙事詩『ギルガメシュ』から現代作家パヴィチの『ハザール事典』まで、壮大な時代・地域を扱いながら、テキストが継承され、翻訳されるとはどういうことか、鮮やかに描き出している。

●テリー・イーグルトン『新版 文学とは何か——現代批評理論への招待』（*Literary Theory: An Introduction*）大橋洋一訳、岩波書店、1997年（現在は岩波文庫、2014年）

大橋洋一『新文学入門』と共にこちら（原著初版1983年）も読んでみよう。必ずしも狭義の批評理論を教科書的に説明するだけの本ではなく、イギリス文学の文脈から「批評とはなにか」という問いに答えようとしている。英語の得意な人は原著（University of Minnesota Press, 2008）で味わうのもよいだろう。

●大橋洋一編『現代批評理論のすべて』新書館、2006年

こちらは情報の提供を主眼に置いた本。多種多様な批評理論を俯瞰できるよう、見やすく整理されている。ここに書かれていることはすべて常識として頭に入れておきたい。

○『シリーズ 言語態』全6巻、東京大学出版会、2001年

「言語態」とは何かを問うた総合文化研究科言語情報科学専攻による総合的研究。

○丹治愛編『批評理論』講談社選書メチエ、2004年

言語情報科学専攻の教員を中心とする執筆者が、章ごとに異なる批評理論（精神分析、脱構築、フェミニズム等）を用いてテキストを具体的に読んだ事例集。

○林文代編『英米小説の読み方・楽しみ方』岩波書店、2009年

言語情報科学専攻の英米文学系の教員を中心としたリレー講義を基にした論集。批評理論の入門ではないが、教室の熱い雰囲気を感じながら、文学作品を楽しむためのさまざまな方法に触れることができる。

批評理論

【フォルマリズム・構造主義】

- フェルディナン・ド・ソシュール『ソシュール一般言語学講義 コンスタンタンのノート』(*Cours de linguistique générale*) 影浦峯／田中久美子訳、東京大学出版会、2007年
20世紀の言語学の方向性を打ち出した革新的な講義を編集したもの。共時言語学の始原であり、構造言語学の重要な概念が提示されている。文学批評にとっても基本書であり、必読の書。
- ローマン・ヤコブソン「文法の詩と詩の文法」(“Poetry of Grammar and Grammar of Poetry”)、「文法的平行性とそのロシア語における面」“Grammatical Parallelism and Its Russian Facet”) いずれも『ローマン・ヤコブソン選集3』(大修館書店、1985年)所収
詩の分析を志す人には必読の文献である。
- ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』(*Problemy tvorchestvo Dostoievskogo*) 望月哲男／鈴木淳一訳、ちくま学芸文庫、1995年
作者の言葉やさまざまな登場人物の言葉の対話的關係について論じている。特に、第5章1の「散文の言葉の諸タイプ」の部分は必読。
- クロード・レヴィ＝ストロース『野生の思考』(*La Pensée sauvage*) 大橋保夫訳、みすず書房、1976年
文化人類学の立場から構造主義的な分析手法を確立した基本文献。
- ◎桑野隆／大石雅彦編『フォルマリズム 詩的言語論』(ロシア・アヴァンギャルド6) 国書刊行会、1988年
フォルマリズムの代表的な論文が収録されている。また、彼らの理論が同時代のロシアのさまざまな文学理論との論争なかで、いかに形成されていったか見ることもできる。
- ◎水野忠夫編『ロシア・フォルマリズム文学論集1』、『ロシア・フォルマリズム文学論集2』 せりか書房、1971年、1978年
現代文学批評の先駆けといわれるフォルマリストたちの理論のほぼ全貌を概観できる。
- ユーリー M. ロートマン『文学理論と構造主義』(*Leksii po struktural'noi poetike, Struktura khudozhestvennogo teksta*) 磯谷隆訳、勁草書房、1978年
言語芸術だけではなく、映画などの視覚芸術も含めて、芸術テキストは「特別なタイプの諸言語を生み出す、組織化された生成装置」として捉える「文化記号論」の代表的著作。

【物語論 (ナラトロジー)】

- ロラン・バルト『物語の構造分析』花輪光訳、みすず書房、1979年
1960年代から70年代にかけてバルトが発表し、物語論への道を切り開いた論文が集められている。テキスト理論について語るためには、「作者の死」を読むことから始めなければならない。「物語の構造分析序説」も、構造主義批評とその後の展開を知るためには欠かせない。
- ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール——方法論の試み』花輪光／和泉涼一訳、水声社、1985年
プルーストの『失われた時を求めて』を契機にして、普遍的な語り体系を模索した名著。物語論の始発駅だが、物語論の分野から一冊あげるとすれば、いまだにこれ以外にはない。原著は *Figures III* (1972)の一部として出版された。

- プロップ『昔話の形態学』(*Morfologia skazki*) 北岡誠司／福田美智代訳、水声社、1983年
 叙述のなかで登場人物たちがどういう機能を果たしているかを分析した、物語の構造分析の古典的な著作。
- ◎ジェラルド・ジュネット『パランプセスト——第二次の文学』(*Palimpsestes. La Littérature au second degré*)
 和泉涼一訳、水声社、1995年
 間テクスト的ないし超テクスト的關係を俯瞰し、分析し、「間テクスト性」「パラテクスト性」「メタテクスト性」「アルシテクスト性」「ハイパーテクスト性」の5つの異なった類型に区別した。
- ◎ベンヤミン「物語作者」(*Der Erzähler*) 『ベンヤミン・コレクション②——エッセイの思想』(浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、1996年)
 構造主義風物語論ではない。物語とは何かが歴史的・文化的な文脈で平易に論じられている。ベンヤミン流のメディア論である。

【マルクス主義批評】

- テオドル・W・アドルノ『文学ノート』(*Noten zur Literatur*) 全二巻、三光長治他訳、みすず書房、2009年
 古色蒼然たるアカデミズムに否を突きつける「形式としてのエッセー」は大学生必読。ベケット論やヘルダーリン論も重要。エリート主義的なモダニストというイメージにはおさまらない、文学作品の繊細な読み手にして、伶俐さと洒脱さとをあわせもつ、卓越した文芸批評家としてのアドルノの姿を知ることができる。
- フレデリック・ジェイムソン『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』(*The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*) 大橋洋一他訳、平凡社ライブラリー、2010年
 タイトルから政治学の本と勘違いして、敬遠する人がいないだろうか？ しかし、本書における19世紀小説の分析やコンラッド論は、文化批評と物語論とマルクス主義批評を自在に駆使し、文芸批評としての醍醐味にあふれている。
- ◎ゲオルク・ルカーチ『小説の理論』(*Die Theorie des Romans*) ちくま学芸文庫、2008年
 原著は1920年刊行。古代の叙事詩と近代の小説とを比較しながら、混沌とした近代の世界を小説がどのように表現してきたかを(いささか悲観的な口調で)検討する。ミハイル・バフチン「叙事詩と小説」(『ミハイル・バフチン著作集』7所収)やイアン・ワット『小説の勃興』(Ian Watt, *The Rise of the Novel*. 藤田永祐訳、南雲堂)につながる小説論の古典。
- ◎スラヴォイ・ジジェク『イデオロギーの崇高な対象』(*The Sublime Object of Ideology*) 鈴木晶訳、河出書房新社、2001年
 いまも旺盛に著作を発表するジジェクだが、まずは原点であるこの本を読んでみよう。マルクス主義のイデオロギー論とラカン派精神分析理論とを融合させ、ウィットに富んだ語り口で文化・社会現象に切り込んでいる。難解なラカン理論の入門としても役立つ。
- レイモンド・ウィリアムズ『完訳 キーワード辞典』(*Keywords: A Vocabulary of Culture and Society*) 椎名美智、武田ちあき、越智博美、松井優子訳、平凡社ライブラリー、2011年
 イーグルトンの師であり、イギリスのニュー・レフトを代表する批評家、カルチュラル・スタディーズの生みの親とも言われるウィリアムズが、文化と社会の問題を考える上で基礎となる131語(「民主主義」、「イデオロギー」、「個人」など)をアルファベット順に配列し、過去から現在までの意味の変遷を批評的に解説している。近年 *New Keywords: A Revised Vocabulary of Culture and Society* (Ed. Tony Bennett, Lawrence Grossberg, Meaghan Morris. Wiley-Blackwell, 2005) が刊行され、邦訳『新キーワード辞典』(河野真太郎、秦邦生、大貫隆史訳、ミネルヴァ書房、2011年)も刊行された。

【精神分析・フェミニズム】

- ジークムント・フロイト「不気味なもの」(“Das Unheimliche”) 藤野寛訳、『フロイト全集』第17巻(岩波書店、2006年)所収
E・T・A ホフマンの小説「砂男」を読解しながら「不気味なもの」の正体を探った著名な論考。フロイトの精神分析学による文学作品と語の読み方を知ることができる。平易なので一度読んでおくとよい。
- ミシェル・フーコー『性の歴史 I 知への意志』(*La Volonté de Savoir (Volume 1 de Histoire de la Sexualité)*) 渡辺守章訳、新潮社、1986年
人間にとって性という現象とはなんなのか。根本的な洞察の書。ジェンダー論は本書抜きには語れない。
- ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(*Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*) 竹村和子訳、青土社、1999年
フェミニズムとジェンダー論に革命をもたらした古典的名著。必読文献の一つ。
- イヴ・コソフスキー・セジウィック『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』(*Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*) 上原早苗／亀沢美由紀訳、名古屋大学出版会、2001年
「ホモソーシャル」という概念を導入することによって文学を大胆に読み替えた名著。現代社会論としてもアクチュアリティがある。

◎ジャック・ラカン「〈わたし〉の機能を形成するものとしての鏡像段階」(“Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je”)、「《盗まれた手紙》についてのゼミナール」(“Le séminaire sur *La lettre volée*”) どちらも『エクリ I』(宮本忠雄他訳、弘文堂、1972年)所収。
「鏡像段階」という概念はラカンの著作から離れて文芸批評にあまねく用いられているが、やはり原典を読んでおくべきだ。ただし邦訳は悪文として名高い。フランス語原文、あるいは Bruce Fink による英訳(Norton, 2007)を読む方がよいだろう(Alan Sheridan による旧訳は部分訳で「《盗まれた手紙》についてのゼミナール」を含まない)。また、『エクリ』では、ポー「盗まれた手紙」を参照しながらシニフィアン(signifiant)の機能を解説した論考も重要。後者はデリダによる批判(「真実の配達人」(“Le facteur de la vérité”) : *La carte postale* 所収、邦訳は「現代思想」1982年2月臨時増刊号『デリダ読本』所収)やジジェクによるデリダへの反論(『汝の症候を楽しめ!』(鈴木晶訳、筑摩書房、2001)第一章)を生んだ。ラカンとデリダの差異については、東浩紀『存在論的、郵便的』(新潮社、1998年)を参照。

○サンドラ・ギルバート、スーザン・グーバー『屋根裏の狂女——ブロンテと共に』(*The Madwoman in the Attic: The Woman Write and the Nineteenth-Century Literary Imagination*) 山田晴子、藺田美知子訳、朝日出版社、1986年
シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』をフェミニズムの視点から読解した章が有名。精神分析・フェミニズムを応用した文芸批評の実例として参考になる。

【脱構築】

- ジャック・デリダ『グラマトロジーについて』(*De la grammatologie*) (上・下巻) 足立和浩訳、現代思潮社、1972年
文字の問題とは何か。書物の終焉とは何か。現前の形而上学の「脱構築」を提起して、20世紀後半のポスト構造主義を決定づけた初期デリダの記念碑的著作。必読だがフランス語原典(Éditions de Minuit, 1967)か英訳で。英訳はポストコロニアル批評の論客スピヴァク(Gayatri Chakravorty Spivak)によるもの(*Of Grammatology*. Corrected edition.

The Johns Hopkins University Press, 1998)。スピヴァクが英訳版に付した序論はデリダへの入門となる。スピヴァク『デリダ論』（田尻芳樹訳、平凡社ライブラリー、2005年）として邦訳されている。本書の大部分を占めるルソー論は、レヴィ＝ストロース『悲しき熱帯』（全二巻、川田順造訳、中公クラシックス、2001）への批判ではじまるが、他方でド・マンによる批判を受けた（ド・マン『盲目と洞察』の項を参照）。

- ジャック・デリダ『エクリチュールと差異』（*L'écriture et la différence*）合田正人／谷口博史訳、法政大学出版局、2013年。

デリダ初期の重要な論文集。待望の新訳が出た。西洋的な思想を脱構築するデリダの手法への入門として必読。フーコー『狂気の歴史』（田村俣訳、新潮社、1975年）におけるデカルト解釈への批判「コギトと『狂気の歴史』」、フロイト理論を脱構築した「フロイトとエクリチュールの舞台」などを収める。

- ポール・ド・マン『盲目と洞察』（*Blindness and Insight*）宮崎裕助／木内久美子訳、月曜社、2012年
デリダの『グラマトロジーについて』におけるルソー読解を批判した「盲目性の修辞学」をはじめ、テキストを批評的に読む態度を（まさに「読む」ことへの批判とともに）教えてくれる必読書。邦訳は初版に基づいており、第二版で追加された論文は訳されていない。すべてを読むには原著（University of Minnesota Press, 1983）によるしかないが、『批評空間』誌（第一期第一、二、六号）に代表的なものは訳されている。

- ◎ ポール・ド・マン『美学イデオロギー』（*Aesthetic Ideology*）上野成利訳、平凡社、2004年
政治と美学との危うい結託関係が鮮やかに炙り出される。スタイルは異なるものの、イーグルトン『美のイデオロギー』（紀伊国屋書店、1996年）もおすすめ。

- ロドルフ・ガシェ『いまだない世界を求めて』吉国浩哉訳、月曜社、2012年
ガシェはルクセンブルク生まれで現在はアメリカで教鞭を執る、デリダ派の思想家。本書は日本語版オリジナル編集の論文集で、日本では紹介の遅れているこの思想家への入門に適している。

文化横断論

【ポストコロニアリズム】

- エドワード・サイード『オリエンタリズム』（*Orientalism*）今沢紀子訳、平凡社ライブラリー、1993年
ポストコロニアル批評の偉大な古典。他者を表象するとはどういうことか。政治権力は人間の認識にどのように影響を与えるのか。サイードは西洋と東洋との長い歴史のなかで実証するが、もちろんこれは現在の私たちの問題でもある。

- エドワード・サイード『文化と帝国主義』（*Culture and Imperialism*）全二巻、大橋洋一訳、みすず書房、1998、2001年
『オリエンタリズム』が理論志向だとすれば、こちらは実践編。ポストコロニアル批評で文学を読むとはどういうことか具体的に分かる。近代小説と帝国主義との切っても切れない関係を論じた「ジェイン・オースティンと帝国」は必読。

- ◎ G・C・スピヴァク『サバルタンは語るができるか』（*Can the Subaltern Speak?*）上村忠男訳、みすず書房、1998年

抑圧された主体の声を知識人が代弁することは可能なのか？ ドゥルーズ、フーコーが代表する「現代思想」のもつ西洋中心主義や隠れたエリート主義を、勇み足を恐れずに批判した問題提起の書。『ポストコロニアル理性批判』という大著に改訂版が組みこまれてもいるが、批判の矛先が鈍ったように思える。

◎ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ『カフカー——マイナー文学のために』(*Kafka: Pour une littérature mineure*) 宇波彰訳、法政大学出版局、1978年

スピヴァクからは西洋中心主義者として批判されたドゥルーズだが、ガタリと組んで発表したこの書物が提唱する「マイナー文学」(「マイノリティー文学」とは微妙に違う)というユニークな概念は、ポストコロニアル研究に応用できるだけでなく、国民国家の文学を超えた世界文学の可能性を示唆している。

【歴史を横断する文学研究】

●池田亀鑑『古典学入門』岩波文庫、1991年(原題は『古典の読み方』至文堂、1952年)
西洋で培われた文献批判の方法を紹介し、これを日本の古典に導入することを提案する。古典とは何か、またどのように伝えられ、どのように研究されるべきかを数多くの事例を挙げながら説いている。

●E・R・クルツィウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』(*Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*) 南大路振一、中村善也、岸本通夫訳、みすず書房、初版1971年
古いし、翻訳でも1000頁近くある大著だが、ヨーロッパ文学を扱う場合、それでも絶対に読んでおかなければならない教科書。

●エーリッヒ・アウエルバッハ『ミメシス——ヨーロッパ文学における現実描写』(上・下) (*Mimesis. Dargestellte Wirklichkeit in der abendländischen Literatur*) 岸田一士、川村二郎訳、ちくま学芸文庫、1994年
ホメロスからヴァージニア・ウルフまで、3000年にもわたる現実描写の変遷をテキストに寄り添うように辿りながら、ヨーロッパ文明に一貫して流れる精神を救い出そうとした大著。大半は著者がナチスの迫害を逃れて移住したトルコで執筆された。エドワード・サイードにも高く評価された本書は、世界文学の時代にこそ再読されるべき、文化横断性・多言語性を備えている。

◎G. ハイエット『西洋文学における古典の伝統』(*The Classical Tradition. Greek and Roman Influences on Western Literature*) 柳沼重剛訳、筑摩書房、1969年
ギリシア・ローマの古典が、中世から20世紀に至るまで、欧米においてどのように受容されたかを記述する「古典的な」名著。原著(Oxford UP, 1949 (reprint with collections 1967))の方が安価にかつ容易に入手できる。

◎L・D・レイノルズ／N・G・ウィルソン『古典の継承者たち——ギリシア・ラテン語テキストの伝承にみる文化史』(*Scribes and Scholars. A Guide to the Transmission of Greek and Latin Literature*) 西村賀子、吉武純夫訳、国文社、1996年
ギリシア・ローマの古典が、写本としてどのように現代に伝わって来たのかについて記述している「古典的な」名著。日本語訳もあるが、原著(Oxford UP, 1991)の方が入手しやすいかも知れない。

【ハイブリッドな文化研究】

●ミハイル・バフチン『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』(*Tvorchestvo Fransua Rable i narodnaya kultura srednevekovya i renessansa*) 川端香男里訳、せりか書房、新版1988年
中世ルネッサンス時期の民衆たちが持っていた「笑いの文化」に焦点をあて、多言語的、多声的なダイナミズムの中にロマン主義以後喪失してしまったカーニバルの「力」を蘇生させようとする批評的な試み。

●バーバラ・M・スタフォード『実体への旅——1760年～1840年における美術、科学、自然と絵入り旅行記』(*Voyage into Substance. Art, Science, Nature, and the Illustrated Travel Account, 1760-1840*) 高山宏訳、産業図書、2008年
他にも高山宏の翻訳で彼女の著作が複数出版されている。いずれも近代科学とヨーロッパ文学・文化に関する刺激的な参考書なので、ぜひ一読を。

◎高山宏『アリス狩り 新版』青土社、2008年

日本の研究書なら、やはり高山宏のめくるめく博覧強記の世界を学生のうちに経験しておくべき。1981年に初版の出た『アリス狩り』は著者のデビュー作。近著では『夢十夜を十夜で』（はとり文庫、2011）がおすすめ。

【翻訳論】

●ヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の使命」（*Die Aufgabe des Übersetzers*）『ベンヤミン・コレクション②——エッセイの思想』（浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、1996年）ほか翻訳多数

翻訳論とは必ずしも「うまい翻訳」の技術を解明するものではない。ベンヤミンの理想とする翻訳は、「読みやすい」訳とはかけ離れたものだが、それゆえに「国語」を超えた文学の可能性を開示する。湯浅博雄『翻訳のポイエーシス——他者の詩学』（未来社、2012年）には、この論文への深い考察がみられる。

◎ジェレミー・マンデイ『翻訳学入門』（*Introducing Translation Studies: Theories and Applications*）鳥飼玖美子監訳、みすず書房、2009年

題名のとおり、翻訳学の歴史と射程を簡便に知りたい人への格好の入門書。原書（Routledge, 2012）は新たに第三版が出たので、そちらを読むことをすすめる。

○ジョージ・スタイナー『バベルの後に——言葉と翻訳の諸相』（*After Babel: Aspects of Language and Translation*）（上・下巻）亀山健吉訳、法政大学出版社、1999年、2009年

ベンヤミン「翻訳者の使命」と同様に、技術としての翻訳ではなく思想としての翻訳を探究した思想書。翻訳という概念によって解釈行為を全面的に捉え直した大著である。

メディアとしての言語研究

【言語の機能】

●ヴァルター・ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」（*Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen*）『ベンヤミン・コレクション I——近代の意味』（浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、1995年）所収

神と人間と事物との言語を媒質とした相互伝達関係について、濃密かつ難解な思考が展開される。読み直すたびに新たな発見があるテキスト。

●J・L・オースティン『言語と行為』（*How to Do Things with Words*）坂本百大訳、大修館書店、1978年
言語行為論（Speech Act Theory）の文字通りの原点。言語の行為遂行性とは何かを考えるためにはこの本を読まずに済ませることはできない。オースティンの思想的継承者ジョン・R・サールとジャック・デリダによる論争については、デリダ『有限責任会社』（高橋哲哉、増田一夫、宮崎裕助訳、法政大学出版社、2003）を参照。

●ヤコブソン「言語学と詩学」（*Linguistics and poetics*）『一般言語学』（川本茂雄監修、みすず書房、1973年）所収

言語学と詩学との関係について述べた論文。有名なコミュニケーションの六機能図式に関する議論は必読。また、詩作品を具体的に分析した部分は欧米の詩を読むときに参考になる。

◎ミハイル・バフチン『マルクス主義と言語哲学』（*Marksizm i filozofia iazyka*）桑野隆訳、未来社、1989年
ソシュールの言語論、フォルマリズムを批判しながら、言葉をつねに「社会的評価」を伴ったものとする立場からの言語論。特に「他者の言葉」についての議論は一読に値する。

◎ミハイル・バフチン『小説のことば』(Slovo w romane) 伊東一郎訳、平凡社ライブラリー、1996年
小説の言葉についての基本的な著作だが、小説以外のさまざまなジャンルの言葉を考えるのに重要なヒントを与えてくれる。

◎フレデリック・ジェイムソン『言語の牢獄』(The prison-house of language : a critical account of structuralism and Russian formalism) 川口喬一訳、法政大学出版局、1988年
ソシュールの言語学、そしてその大きな影響を受けて展開したロシア・フォルマリズムと構造主義を、マルクス主義批評の立場から批判的に検討した著作。

◎尼ヶ崎彬『日本のレトリック』ちくまライブラリー、1988年／ちくま学芸文庫、1994年
レトリックを「文法に逆らってまで正確な表現をめざすこと」と捉える見地から、和歌の修辞技法に代表される日本の伝統的な「あや」を縦横に解析する。

【言説と装置】

●ミシェル・フーコー『言葉と物』(Les mots et les choses) 渡辺一民、佐々木明訳、新潮社、新装版2000年
これは読まないと話にならない。言語と文化の関わりから、「人間」の存在の仕方まで、時に緻密に、時に大胆に語る20世紀の古典。

●ミシェル・フーコー『知の考古学』(L'Archéologie du savoir) 慎改康之訳、河出文庫、2012年
フーコー言説理論の方法論をなす著作。「考古学」は「アーカイヴ学」でもあり、現代のメディア社会を考えるためにも重要。

●ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』(Strukturwandel der Öffentlichkeit) 細谷貞雄／山田正行訳、未来社、1973年／第2版、1994年
ジャーナリズムの発達と近代の公共空間の成立を歴史的に捉え返し、近代社会におけるコミュニケーションの問題の起源を論じた古典。

●柄谷行人『日本近代文学の起源』岩波現代文庫、2008年／講談社文芸文庫、2009年
国民文学としての近代文学の成立がどのように確立したのか、風景や告白といった見えない制度の機能を明らかにした名著。岩波現代文庫の「定本」と、講談社文芸文庫の「原本」の二つの版がある。定本の方が読みやすいが、できれば原本も味読してほしい。初版は1980年。

◎スティーヴン・グリーンブラット『シェイクスピアにおける交渉』(Shakespearean Negotiations: The Circulation of Social Energy in Renaissance England) 酒井正志訳、法政大学出版局、1995年
英語圏の文学研究に大きな影響を与えた新歴史主義(ニューヒストリシズム)を代表する研究書。グリーンブラットの上記の著書はやや古いものの、現在、英米の文学研究では新歴史主義を修正したような理論が話題になることが多いので、読んでおいて損はない。

◎ニクラス・ルーマン『社会構造とゼマンティック 1』(Gesellschaftsstruktur und Semantik I) 徳安彰訳、法政大学出版局、2011年
再帰性や自己言及性を基礎に社会をとらえるルーマンの社会システム論からの言語や意味へのアプローチ。

○蓮實重彦『反＝日本語論』筑摩文庫、1986年
日本語、あるいは言語というものの不思議さについて、ユニークな視点から切り込んでいる。

○水村美苗『日本語が亡びるとき——英語の世紀の中で』筑摩書房、2008年

賛否両論あるが、文芸批評の本で近年これだけ議論されたものはない。問題提起そのものは重要だし、提起の仕方についても学ぶべき点がある。

【文字の文化史】

●ロジェ・シャルティエ、グリエルモ・カヴァッロ編『読むことの歴史——ヨーロッパ読書史』(*Histoire de la lecture dans le monde occidental*) 田村毅他訳、大修館書店、2000年
西洋世界において、書物と読書行為がどのように社会と関わり、文化の形成にいかなる役割を演じてきたかを時系列に沿って論じた良質の論文集。書物史に関心がある人にとっては必読書。

●マーシャル・マクルーハン『グーテンベルクの銀河系』(*The Gutenberg Galaxy: the Making of Typographic Man*) 森常治訳、みすず書房、1986年
グーテンベルクによって発明された印刷術が近現代の文化に何をもたらしたかを考える上で欠かせない一冊である。

●ウォルター・J・オング『声の文化と文字の文化』(*Orality and Literacy*) 林正寛他訳、藤原書店、1991年
口承性の文化、文字の文化を考えるうえで出発点となるメディア論の古典。文学の成立および機能の問題について距離を置いて考える手掛かりを与えてくれる。

◎ジャック・グディ『未開と文明』(*The domestication of the savage mind*) 吉田禎吾訳、岩波現代選書、1986年

人が文字を書くとはなにか、文字を書くことで人間の思考はどのように変化したのか。リテラシー・スタディーズの出発点となった文化人類学の古典。

○宮下志朗『本の都市リヨン』晶文社、1989年

16世紀にパリと並んでフランスの出版業の中核を担ったリヨンの興亡を余すところなく描いた大著。出版史に関心のある人におすすめする。

【メディアとイデオロギー】

●ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』(*Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*) 白石隆／白石さや訳、書籍工房早川、2007年

言わずと知れたナショナリズム論の古典だが、メディア論としても重要。「国民」という想像の共同体の成立と出版資本主義との密かな繋がりが炙り出される。

●マーシャル・マクルーハン『メディア論——人間の拡張の諸相』(*Understanding Media: the Extensions of Man*) 栗原裕／河本仲聖訳、みすず書房、1987年

テレビが出始めた60年代に書かれた本書は、「スマホ」や「 아이폰」が巷を闊歩し、ネット上で膨大な情報がうねり続ける現代には古臭くも見える。しかし、メディアとは何かを改めて考えるときに必ず立ち返るべき古典がマクルーハンである。

●ヴァルター・ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」(*Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit*) 『ベンヤミン・コレクションI——近代の意味』(浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、1995年) 所収

メディア技術の発達による芸術作品のアウラの喪失を論じたメディア論の古典。

- マックス・ホルクハイマー／テオドール・W・アドルノ『啓蒙の弁証法：哲学的断章』(*Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente*) 徳永洵訳、岩波文庫、2007年
文化産業とは何かを考えるための出発点となる古典。
- ◎ウンベルト・エーコ『開かれた作品』(*Opera aperta*) 篠原資明／和田忠彦共訳、青土社、1997年
現代芸術の経験とメディアとの関係はどのようなものか。テレビ論「偶然性と筋」は、テレビ記号論の出発点。
- ◎フリードリヒ・キトラ『グラモフォン・フィルム・タイプライター』(*Grammophone Film Typewriter*)
石光泰夫／石光輝子訳、ちくま学芸文庫、2006年
現代のメディア論の古典。テクノロジーと人間の意識や身体との複雑な関係について、領域横断的な思考がスリリングに展開される。
- レイモンド・ウィリアムズ『文化と社会 1780 - 1950』(*Culture and Society 1780-1950*) ミネルヴァ書房 (ミネルヴァ・アーカイブズ)、2008年
文化研究 (カルチュラル・スタディーズ) によるメディア文化論の出発点となった古典。
- レジス・ドブレ著『一般メディアロジー講義』(*Cours de médiologie générale*) 嶋崎正樹訳、NTT出版 2001年
象徴はいかに力となるのか。人間文明における「媒介 (メディアーション)」の問題とは何か。「媒介作用」により人間文化の生態学を説く著作。
- ◎石田英敬『大人のためのメディア論講義』、ちくま新書、2016年
世界のメディア学の第一線で活躍中の著者による平易ながら濃密な入門書。